

2014年度（平成26年度）

【独自事業】

① リーフレット『さんまずし。なれずしー

紀伊半島南部に生まれた食文化のサンマの食文化』の作成

さんま漁業発祥の地とされる熊野灘。紀伊半島南部には、熊野灘で獲れるさんまを使ったすしの文化が伝承され、熊野地域を代表する郷土料理になっている。また、もう一つの特徴であるさんまのなれずしは、紀伊半島の地理的位置と黒潮の恩恵なしには生まれなかった発酵文化である。

リーフレットは、和歌山、三重、奈良3県で行なった聞き取り調査を中心に、東北から紀伊半島までの太平洋沿岸に伝わるさんまの食文化をまとめたものである。絵と編集はイラストレーター大神慶子さん、画家廣本直子さん、デザイナー太田博久さんら県内外のアーティストに依頼。500部印刷。

② 作り、味わい、語る「サンマの食文化 体験伝承とトークセッション」

紀伊國トレイナート実行委員会が、10月25、26日にJRきのくに線の紀南地域沿線で展開した「紀伊國トレイナート2014～9つの地域をつなぐ列車と駅舎アート～」に連動した企画で、25日にJR新宮駅前で開催した。

- ・1部 新宮市のかあちゃんの店の竹田愛子さんらの協力で、20～30歳代の女性を主な対象にした「母から娘に伝える さんまずし体験教室」を開き、10人余りが受講した。生徒の募集では新宮市、和歌山県東牟婁振興局が協力、運営スタッフとして和歌山県地域・自治体問題研究所やトレイナート実行委員会の女性2人がボランティアで協力。
- ・2部 「さんまずし その豊かな発酵の食文化」をテーマにトークショー  
さんまずしとなれずしを中心にした熊野のすし文化・発酵文化について、東京在住の発酵研究家辰野めぐみさん、新宮市の料理研究家西嶋久美子さんをゲストに行った。

③ 「大学と商店街の連携・交流による新宮市仲之町商店街活性化モデル」調査報告書

空き店舗が目立つ新宮市・仲之町商店街で、和歌山大学経済学部学生が2012年から2013年に商店主・消費者などを対象に行ったアンケート調査に、地域経済の変容に関する追加調査を加えて報告書にまとめ、商店街活性化の可能性を提言する。

④ 「廃校舎の利活用と地域再生モデル」ブックレット作成

人口減少社会を迎えた日本では、こどもの数が減少、国は学校の統廃合の促進を打ち出した。和歌山県内では郡部を中心に廃校になる小中学校が相次ぎ、統廃合・廃校舎問題は今後都市部でも顕在化する見通しだ。学校は、子どもの教育を中心に地域文化の中核

であり、学校消滅はコミュニティの弱体化を招くことが予想される。

「大量廃校舎時代」の廃校舎の活用はどうあるべきか。地域づくりの拠点として再生している事例（８校程度）を、紀南地域を中心にしたブックレットにまとめ、地域に提供する。

#### 【共同事業】

##### ⑤ 「トレイナート」車中での「さんま食文化談義」

紀伊國トレイナート実行委員会がJR和歌山支社の協力で、25日午後に運行したアート列車の新宮一串本間の車内で辰野めぐみさん、みなべ町の料理研究家宮本とも子さんと鈴木事務局長が、「食文化はアートだ」をテーマに、紀南地域のすし文化を語り合い、アーティストや乗客が話に耳を傾けた。また、かあちゃんの店や宮本さんが作った串本の「いちごずし」などが希望する乗客にふるまわれた。

#### 【協力事業】

##### ⑥ シンポジウム「わがらの高原・10年の10年後」のコーディネート並び「住民意識調査報告書」の作成協力

田辺市中辺路町のNPO囲炉裏の提案で高原区が、熊野古道が紀伊山地の霊場と参詣道としてユネスコの世界遺産に登録10周年を迎えたのを機に、2014年6月29日に地区集会所でシンポジウムを開催した。

シンポジウムでは、真砂田辺市長が世界遺産の巡礼の道スペイン訪問の報告を行なったあと、地元住民とともに世界遺産熊野と地域のこれからについて話し合った。

また、きのくに活性化センターでは、シンポジウム開催に先立ち、「住民意識調査」を行ない、世界遺産・熊野をどのように評価しているのか、意識や行動に変化は生まれたか、さらにつぎの10年への展望を探った。

高原地区は人口66人で過疎化と少子高齢化が急速に進む一方、この10年の間にIUターンによる9人の新住民が誕生している。